
6月の遺書

歩人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

6月の遺書

【Nコード】

N0954L

【作者名】

歩人

【あらすじ】

1人の少年と9人の男女。

彼らが織り成す十人十色の人生の形。

愛とは何か。人生とは何か。

人の数だけ、物語がある。

人は『誰か』になんて、絶対に、なれない。

終わりの始まり（前書き）

初の投稿となります。

読みづらい部分等ありましたら、ご意見いただけるとうれしいです。

終わりの始まり

「就職だの、恋愛だの、俺にとっては大して重要なことじゃないんだよ。」

6月の陰鬱な雨が降りしきる中、くたびれた安アパートの一室でそんな愚痴をもらす。

大学3年生。周りの男たちは、髪の毛を黒く染め、

『やっぱり仕事はやりがいだよ。』

『新卒なんて、働いてなんぼでしょ。』

『企業とのマッチングを考えたほうがいいよね。』

などと、受け売りの知識でディスカッションを始める。

周りの女たちは、

『なるべく大手の一般職に入れれば、出会いもたくさんあるよね。』

『日曜日は、家族みんなで買い物に行くような家庭にしたいな。』

『結婚するなら収入が安定してる人だよね。』

などと、先を見据えすぎた会話に花を咲かせる。

ステレオタイプの就職活動。結婚こそが最高の幸せ。右向け右の日

本社会。それを悪いと感じたことは一度もない。

ただ、俺にはできないだけだ。

夢はあるか？と、聞かれたら、ある、とは答えられる。

それはなんだ？と、聞かれたら、まあ色々、と、答える。

やる自信がないわけでも、実現不可能な事でもないとは思っている。

ただ、その夢について、周りが自分勝手にああだこうだと批評を始めることに、耐えられないだけだ。

いつから俺は、こんな暗い人間になってしまったのだろう。

いつから人生に、希望が持てなくなったのだろうか。

中学、高校と私立に通い、部活でキャプテンを務めたこともある。

大学も、国立には残念ながら受からなかったが、都内の有名大学に通っている。

決して頭は悪くない。

社交性もあると自負している。

友達の数だつて、1000や2000じゃおさまりきらない。

ただ、その中で、『親友』と呼べる人間は1人もいなかった。

星の憂鬱

6月。

彼はこの季節が大好きだった。

全てを洗い流してくれるような雨。コンクリートの香り。全てが彼を癒してくれた。

「キヤー！ケントー！こっち向いてー！」

ファンにいつもの笑顔で手を振る。決まりきった光景だ。

来春から始まる大河ドラマの主演が決まった井上健人は、24歳。

端正な顔立ちに、吸い込まれそうな黒髪と、ひとつだけ空けたピアスがよく似合う。

女性関係の噂を聞かない、クリーンで爽やかを売りにしている、人氣絶頂の俳優だ。

映画やCM、バラエティーにも連日顔を見せる、マルチタレントといてもいい。

趣味はサーフィンとピアノ。特にピアノはコンクールを受賞したほどの腕前だという。

父は幼い頃に酒と女にまみれた拳闘、借金を作って逃げ出し、デザイナーの母に、女手ひとつで育て上げられた。

何不自由のない生活ではなかったが、友人にも、チャンスにも恵まれ、まっすぐに育ってきた。

収入の使い道は、母のために家を建てたり、東南アジアの貧国に学校を建てたりと、幼い頃の経験からであろう、とにかく、『人のために何かをする』というものが多かった。

「京都はいい場所ですね。今度は母を連れて、2人で旅行に来ようと思います。」

そうインタビューで語る彼の目には、一点の曇りもなかった。

少なくとも、大衆の目には、そう見て取れた。

睡眠時間を削って仕事をし、夜はテレビ局の関係者との食事会。

次の日の朝一番で福岡に飛んでグルメ番組の収録をし、あからさまなりアクションでお茶の間を沸かす。

夕方は東京でバラエティー番組の収録をし、ありえない解答で、『おバカタレント』を演出。

かと思えばドラマのラブシーンでは、誰もがうらやむ有名女優との熱烈なキスシーンをこなす。

そんな非日常的な日常に、彼は辟易していた。

どこの誰かもわからない、どこにでもいるような普通の学生として、買い物に行ったり、女の子と遊んだり。

長年付き合った彼女と結婚をし、子供は2人。

ローンが残っているマイホームには犬を飼い、小さな陽だまりの庭でわが子の成長を見守る。

そんな毎日に憧れていた。

そうして、彼は自宅のマンションで首を吊った。

100インチはあるかと思われる大スクリーンに、ホームシアター！

きつと忙しくて弾けなかったのだと思われる、埃の被ったグラウンドピアノ。

東京の夜景が一望できる大きなテラス。

大きなベッドに、豪華なシャンデリア。

そんな部屋に、死体と、『母さんごめん』と書かれた小さな手紙は、あまりにも不釣り合いすぎた。

電脳世界

テレビをつけると、最近やたらと見るようになったタレントが、笑顔でインタビュアーに答えている。

『持って生まれて来た物が違いすぎるのさ。男は配られたカードで勝負するしかないんだよ。』

と、太った男はどこかで聞いたことのあるセリフを思い浮かべる。

彼は、めったに口を開かない。と、いうよりも、開く必要がないのだ。

たまに開くことがあるとすれば、食事を持ってきてくれた母親に対し、罵詈雑言を浴びせる時か、自分の呼びかけに反応してくれる、恋愛ゲームをするときだけだ。

時間の感覚なんてとうにない。

今日が何月何日で、何曜日で、どんな天気かなんて、彼には瑣末な問題だった。

今日もどこかの誰かとモンスター退治に出かけるこの男の名はセツナ。職業は、今をときめく魔導剣士だ。

もちろん、そのどちらも本物ではない。

が、彼にとってはそれが全てだった。

もちろん、リアルとバーチャルの区別がつかないような年ではないが、彼にとってはバーチャルこそがリアルだった。

『僕はあのタレントとは違う。あいつには世界を救う力はない。』
ぶふー。と、重いため息をつきながら、ビルのような体躯の竜と、心不乱に戦っていた。

『そろそろ魔導剣士にも飽きたな。転職でもするか。』
とてもこの不景気に発せられるような言葉ではない。

しかし、彼が生きる世界では、そんな不景気を感じさせないほど、転職や商売は盛んに行われ、昼夜問わず、人が溢れかえっていた。

『欲しい防具を買うだけの金はたまった。次は竜騎士かな。』

そんなことを思いながら、ボサボサに伸びきった、フケだらけの髪を掻き揚げ、重たい体に鞭打ってトイレへと立った。

部屋にためたペットボトルで生理現象を済ますことはない、というのは彼の自慢だった。

飲み物やお菓子を買うため、ネットマネーへのチャージの為なら、コンビニ程度の外出だって、できる。

彼の自慢だった。

トイレを済ませると、妙な違和感を覚えた。

いつもなら部屋の扉が開く音がするたびに、母親が何か叫ぶはずなのに、今日はそれがない。

『そういえばまだ食事もしていないな。』

空腹には勝てないか、と思いながら、階段をギシギシを音を立てて降りていく。

居間に着くと、見慣れない光景が彼の目に飛び込んでくる。

『……ゲームオーバーかな。』

思い切り手首を切ったのだろう、おびただしい量の鮮血にまみれた母親の手には、鋭く研がれた包丁が握られていた。

食事の支度をしていたのだろう、にんじんやじゃがいもが、切りかけのまま放置されていた。

『……カレー、食べたかったな。』

彼はとつくに気づいていた。自分の存在が、母親の重荷になっていたことを。

『妹にも……迷惑掛けたな。』

年の離れた妹は、働きもしない兄が家にいるのを嫌がり、友人を家に呼べないでいた。

『親父……ごめんな。』

決して多くはないが、残された家族が生きていけるほどの金を残し、3年前に他界した父の遺影に手を合わせながら、彼は呟いた。

「先立つ不幸を、お許しください。・・・なんてな。両親に先立たれてりゃ世話ないわ。」

そうして彼は、自分の人生のリセットボタンを押した。

母が手首を切った包丁で。

自分の世界は、両親が一生懸命働いた金で、成り立っていたことを、やっと理解した。

「生まれ変わったら、あいつみたく、人のために、何かできるかな・・・」

居間のテレビには、爽やかな笑顔で彼の死を見送る青年の姿があった。

気がつくと、外は雨が降っていた。

紫陽花の花言葉（前書き）

ちよつとアレな表現が出てきます。
嫌いな方はごめんなさい。

紫陽花の花言葉

物憂げな天気。

夏と呼ぶにはまだ早く、春と呼ぶには遅すぎる。

ジメジメとした6月の空は、なんとなく彼女を不安にさせた。

「ユウリ！早く帰ろうよ！みんな待ってるよ。」

「あ、うん。」

柏木悠里は都内の女子高に通う女子高生。決して派手ではないが、地味でもない。

しかし、どこにでもいる、と言うのは失礼なほど、整った顔立ちをしていた。

「ねえねえ、カラオケよってかない？」

「いいねいいね！」

放課後の帰り道。商店街では、晩御飯の買い物であろう、かごを抱えた主婦が、熱心に品定めをしている。

「カラオケなんて、久しぶりだな・・・」

そうつぶやいて彼女は、友人の楽しげな会話を笑顔で聞きながら、道端の紫陽花に心を奪われていた。

紫陽花が好きだった。

友人たちは、慣れた感じでカラオケの手続きを済ませ、部屋に入っていく。

テレビで流れるR&Bや、J・POPが、次々と流れ出す。

「やっぱり悠里は歌うまいよね。でも、これなんて曲？」

「ちょっと昔の歌なんだ。お兄ちゃんが好きでよく聴いてて・・・」

そこまで言うてはっと気づく。

「悠里！お兄ちゃんいたの？悠里のお兄ちゃんだからかっこいいでしょ？」

家族のことは、友人にあまり話さなかった。

父親が死んだときも、誰にも話さなかった。

きつと心配されるから。

気をつかわれるから。

「お兄ちゃんは・・・死んじゃったんだ。」

でも、嘘をついた。

「そっか・・・ごめん。」

「・・・いいよ！そんなことより歌おうよ！」

正直言つて、悠里にとって自慢の兄ではなかった。

世間でいうと『NEET』『引きこもり』。

母のストレスが日に日にたまっていくのを、見て見ぬ振りをするしかなかった。

罪悪感にさいなまれていて、突然の来客があった。

「こんばんわー。俺たち男だけ来ててむさ苦しいんだよね。一緒に歌ってくれないかな。」

よくあるナンパの手口。おそらく大学生であろう、その男たちは、お酒を飲んでいるようで、若干舌が回っていないかった。

女子高なので、男と遊ぶ機会はあまりない。悠里は正直気は進まなかったのだが、友人たちは喜んで彼らを迎え入れた。

今時の女子高生だつて、お酒くらい飲むよね？という誘いも断りきれずに、悠里たちは完全に男たちのペースにはまっていた。

飲んだことが一切ない、とは言わない。が、それは私服で、しかも友人の家の話だ。

制服で、しかも見知らぬ男と飲むには、初めての経験だった。

悠里はトイレに逃げ込んだ。吐くわけではない。ただ、得体の知れ

ない男たちと同じ空間にいるのに、耐えられなかったただけだ。

「潔癖症なのかな、私……」

鏡に映った自分の疲れきった顔を見て、彼女はぼつりともらす。

「悠里ちゃん？大丈夫？」

突然男の1人がトイレに入ってきた。

「……女子トイレですよ。」

なるべく、強い語調で、言い聞かせるように男に言う。

「俺さ、最初見たときからさ、いいなと思ってたんだよね。」

男は聞く耳も持たない。

悠里が次の言葉を発そうとするや否や、男の舌が、悠里の中に入ってくる。

レイプ。

悠里の頭の中に、そんな言葉がよぎった。

抵抗しようにも、酔っていて力が入らない。

声も出ない。

事が終わると、男は何も言わずその場を後にした。

悠里は吐いた。何度も。何度も。

自分の甘さが、情けなくなつて涙を流した。

誰にも言えずに1人帰路につく。

通りの紫陽花は、なぜだか少し元気がなかった。

友人たちには、門限があつて帰つたことにしよう。

母には、心配させないように、できる限り明るく振舞おう。

いつも以上の元気で居間に飛び込む。

そこに、いつもの母親はいなかった。

いつもの日常は、跡形もなくなつていた。

「お兄ちゃんも・・・私が『死んだ』っていったから・・・？」

彼女の目にはもはや、生气は宿っていなかった。

いつか生まれてくるであろう子供にお別れも告げぬまま、彼女はその命を絶った。

『私もね、いい子になんかなりたくなかった。誰にも会いたくなかった。』

『本当はずっと怖かった。』

『でも、もう終わり。』

『誰もいない、世界に行くんだ。』

紫陽花の花が、好きだった。

ツクラレタセカイ

「あー雨だよ。このまま講義サボって麻雀でも打ちにいっくべー。」

電車を降りた友人たちは、学校とは逆の方向へ歩を進める。

「俺パス。女んちでも行くわ。」

そういつて学生で溢れかえる学生たちの群れを抜け、改札口へと消えていった。

「またかよマサキ。最近あいつ付き合い悪いよな。」

進藤正樹は先日20歳になったばかりの大学生。

見た目は一言で言うと『チャライ』。

周りからは、『地元で100人切りをやったのけた。』『渋谷でDJをしていて、女には何不自由していない。』などと根も葉もない噂をたてられていた。

しかしその実、マサキは童貞であった。

先日までは。

もちろん帰ったところで待っている女などいない。

勝てもしないバチンコで金を浪費し、夜はコンビニでアルバイト。

彼の大学生活は、虚構で塗り固められていた。

日付も変わろうかという時間。

正樹は傘もささず、一人大通りを歩いていた。

「・・・まだあの感覚、残ってら・・・」

小さな頃から万引き、ケンカなど、犯罪には手を染めたことはなかった。

ただひたすら、ひたすらいい子に生きてきた。

「酒なんて・・・飲むもんじゃねーな・・・」

先日のカラオケの光景を思い出し、自己嫌悪に陥っていた。

「あの女子高生たち、すげー楽しそうだったな・・・」

知らず知らずのうちに自分と彼女らを比べ、壊してしまいたくなっただのかもしれない。

「サイターの人生だったな。何一つ楽しいことなんかなかった。」

そうつぶやいて、正樹は車道に飛び出した。

大型トラックが容赦なく正樹をはねる。

自分がいなくても、また明日から世界は何事もなく回るんだ。

そう考えたら、死ぬことは決して悪いことではないような気がして
いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0954/>

6月の遺書

2010年10月10日04時31分発行